

## 第 70 回国際理解・国際協力のための高校生の主張コンクール東京都大会 銀賞

学習院女子高等科 1 年

鎌田 琴子

### 課題①

今年は SDGs の中間年。あなたが、ユースリーダーとして SDGs 達成に向けた若者の取組を提案するとしたら、どのような提案をするか。

### 副題

親子で受け継ぐリユースによるサステナブルファッション

今年の夏、ハケ岳への修学旅行があり、数着の服が必要になりました。服を選んでいる際、たまたま母のクローゼットを開けると、母が着ていない、まだ真新しい服を見つけました。素材も良くシンプルで、私がファストファッションで購入しようと思いついて描いていたデザインであり、まさに灯台下暗しでした。その他にも私好みの服が何着もあり、譲り受けることとなりました。

以前私は、SDGs 17 の目標のうち、「気候変動に具体的な対策を」について調べたことがあります。二酸化炭素削減について調べていくと、ファッション産業は、全産業のうち第 2 位の汚染産業であると国際連合から指摘されていることが分かりました。製造過程も含め、着用される期間が短く、また廃棄などにも環境負荷が大きいと、国際的な課題になっているという調査結果に衝撃を受けたことを思い出しました。

私達高校生に出来る身近な二酸化炭素削減。一つの提案として、「親子で受け継ぐリユースによるサステナブルファッション」はどうでしょうか。

環境省が 2020 年～21 年に実施した調査によると、衣服のリサイクルは 14%、リユースは 20% に過ぎず、66% は処分されています。処分される量は年間で 48 万トンあり、それらは焼却処分され、環境負荷が生じています。また、服の原材料を調達する際にも環境負荷が生じています。ポリエステルにおいては、石油資源の使用や工場での二酸化炭素排出が挙げられます。このようにファッション産業では、年間で約 9 万キロトンもの二酸化炭素を排出しています。それにもかかわらず（原稿は「関わらず」ですが平仮名でよいかと）、服はファストファッション化し、短いサイクルでの使用期間となっています。さらには着用されない服も数多くあるようで、一人あたりの年間に着用しない服は、25 枚も存在するようです。

4 年前、地域活動の一環で古着リサイクルの回収についてお手伝いをしたことがあります。真新しい大量の服が雑多に積み上げられ回収されていく様子に、罪悪感のような感情を抱くとともに（原稿は「共に」ですが平仮名でよいかと）、それらは廃棄されず、リサイクル・リユースされるのだと無理に納得させようとする何とも言えない複雑な感情を抱きました。しかし、新型コロナウイルスが蔓延して以降、リユース活動は減少しているそうです。バザーやマーケットが開催されなかったり、服

に対するリユース需要が減ったことなどが考えられます。そうした今だからこそ、まずは親子間でのリユースが始めの一歩になると思うのです。

江戸時代は SDGs の最先端であったようです。着物は徹底的にリサイクルされ、親から子、兄弟へと受け継がれ、最終的にはおむつ、雑巾など完全に使い尽くされていました。雑巾で終わりではなく、ボロボロになった後はかまどの燃料になり、燃え尽くした灰でさえ農業用の肥料として最後まで使われていました。江戸時代の衣服に対する循環型社会の考えを今こそ学び取り、まずは親子間でのリユースという日本の「MOTTAINAI」行動の根本的な思想の原点に立ち返ることが、高校生である私達が今日から始められる身近な二酸化炭素削減の第一歩だと思うのです。

高校生になった私達の背丈は両親に近づき、両親の服を意外にちょうど良く着こなせる年齢となりました。父の身長を超えつつある弟にも提案し、父の眠っている服に宝を発見したようです。ファストファッションの服を買いに行く前に、まず両親のクローゼットを開けて眠っている服を探してみましょう。同じ遺伝子を持った者同士、趣味嗜好が似た好みの服がきっと見つかるはずですよ。この行動が私達にできる日本人らしい「MOTTAINAI」行動であり、身近な二酸化炭素削減の一歩になるはずですよ。おしゃれを楽しみながら、国際連合が深刻な課題として指摘している気候変動に対する具体的な対策ができる。私達高校生らしい SDGs の取り組みではないでしょうか。

ご清聴ありがとうございました。